

## 二百円の人間模様

山口 忠一

私は、中学校を卒業した十五歳の春、実社会の荒波に「飛び込んだ」のではなく「放り出された」という表現が似合うように、金の卵の社会人として、六十年近くも農業一筋に生活してきました。

専業農家の私も、体力の衰えと共に少しずつ経営内容も変わってきました。その為私は、久能山東照宮の参道下二百メートル西側に、無人駐車場を経営するようになりました。その駐車場経営の根底には、農村社会の中で育てられた「純朴」がありました。駐車するお客さんのすべての人が、皆善人という前提の下に経営する駐車場です。

看板には、「無人P二百円」と大きく書かれ、国道百五十号線から良く見えるように建てられました。

当日から営業に入りましたが、心配された料金の回収は、二百円の倍数の計算上でした。やっぱりお客様は皆善人でした。

その後、七年間の間にはいろいろな出来事がありました。

いろいろな話は、良いに付け悪いに付け、人から人に、凄スピードで広がって行きます。その上ネット社



会では、利用してくれたお客様が、写真付きの情報をネット上に載せてくれます。

ネットの書き込みには、料金の安さに驚いた人や、無人の経営に驚いた人などが特に多かったです。

始めの頃は、私にも本当にお金の回収が出来るのか？ 利用者は、本当にお金を払うのか？ 疑心暗鬼の日でした。でも、私が信頼すれば相手も信頼してくれる。そんな強い気持ちで十日、二十日と過ぎて行きました。

その結果、ほとんどの人が無人にも関わらず、小さな料金箱に二百円投入してくれました。そんな二百円から生まれる、様々な人間模様を紹介してみたいと思います。勿論、私も含めてですが。

ある人は、午後十時に駐車して夜中の十二時を回ったので、二日間の料金として、メモと一緒に四枚の百円コインが、セロテープで留めてありました。また、一円、五円、十円が混入した二百円の人。この人の時は、一瞬疑いの目を持ってしまいました。ピッタリ二百円のお金が揃っていた時には、私自身大いに反省をしました。

また、釣り人と世間話をしていたら、途中で「俺はまだ二百円を払ってなかった。」と言って支払う人も居ました。世間話の中で、気が咎めたのかな？ また、正月の三が日は、駐車場の整理係のバイトも入るので、五百円の料金になります。しかし、前浜で磯釣りのお客さんには、一年を通じてのお客さんだから、「いつもの二百円で良いですよ。」と言って二百円を頂いていました。

元日の朝、ひとりのお客さんが「今日は一年の始まりです。初詣の人と同じ五百円で良いです。」と言って五百円を支払ってくれました。正月早々気持ちの良いお客さんでした。

正月の初詣には、いろいろなお客様に出会います。一番の思い出は、元日の夕方、もう少しで日没という時間に入って来た一台の車が、「駐められますか？」と聞いてきました。こんなに遅い時間にといいながら聞くと、「上の社務所のあたりに、子供のジャンパーを忘れてきたから、お父さんが取りに行くのでそれまで駐めさせてください。」との事でした。奥さんは、「料金は五百円ですか？」と言いながら、財布を車から出してき

ました。その時、「あなたは参道下の駐車場で千円も払ったでしょう。久能山東照宮での参拜で、二度も払わなくていいから。」と言ってお金は受け取らずに帰しました。あの時のお父さん、頑張って社務所まで走って行ったと思います。その家族にも、私にもホッとするそんな思い出もありました。

また、この様な家族もありました。東照宮への参拜も済み、お昼ごはんの時でした。「駐めた車の後ろで食事しても良いでしょうか？」との質問でした。ママの手づくり弁当を家族で食べたい様でした。「手作りのランチなら、海に行つてゆっくりと砂浜で食べて来な。海には入らないで、気を付けて行って来な。」と言って送り出しました。世の中では、ファミレスの全盛の社会ですが、家族そろつての初詣に、ママの手作りのお弁当を食べる子供たちに羨ましさを感じました。一時間程過ぎた頃帰つて来て、家族皆満足そうな顔でした。そんな顔を見るのも農業では体験しない出来事です。

中には、悪い人も居ますよ。一千万円もするような高級車にのつて来て、駐車料金を、百円誤魔化して駐める輩も居ました。

また、一円二枚、十円二枚、五十円二枚の人も居ます。「ここは、賽銭箱ではないよ。」と言いたくなる時があります。私も、人間的には未熟なひとりです。料金不足の時などでは、頭がかったなり、見えない相手を罵倒している自分が居ます。そんな自分が恥ずかしくなります。そして、世の中どこにでも悪い人はいると思つて忘れる事にしています。長い人生の中では、料金を誤魔化す人は、子供の時に食べた、麦飯の中に入つていた砂粒の様なもの。そんな考え方を持つと、スーと気が楽になつて行くのが体で感じられました。もっとも、今のご飯には砂粒などが入る事などありませんがね。

無人駐車場の経営は、農業の世界では巡り合えることのない、いろいろな人間模様を見せてくれました。自分の人生に、着せ替え人形のように、新しい洋服を身に着けたようでした。

これからも、いろいろな服に出会うかも知れないが、出来れば私に似合う服が良いねと思ひ、自分磨きをしながら、これからも無人駐車場を続けて行きたいですね。